חַג הַסֻּכּוֹת

2022（5783）

בְּרֵאשִׁית

ט

ハッスッコート　　ハグ

חַג הַסֻּכּוֹת　仮庵の祭り

ベレーシート

בְּרֵאשִׁית

創世記１章　９回目

20 節～23 節

神はそれらを祝福して、

「生めよ。増えよ。海の水に満ちよ。

鳥は地の上に増えよ」

と仰せられた。

創世記 1 章 22 節

この学びは「新改訳 2017」を基本としています

第五日に入ります。

第四日は、地を照らすための光る物（太陽、月、星）をרָקִיעַ（ラーキーア）**（大空）に置きました。　光る物は、**

神のご計画を示す例祭の「しるし」として、　神の必要とされる日の「しるし」として、特別な日（50 日とか、三日とか）の「しるし」となるように置かれました。

今までの創世記１章のイメージとは、かなり変わると思います。

光を昼と名づけ、闇を夜と名づけた話も、

私たちの考える、明るさや暗さの概念ではありませんでした。

昼とは、

神のご計画の中で、神のわざが現されることです。

イエシュアが実践された、盲目の目が見えるようになり、足なえが立てるようになったのも、神のご栄光が現される昼のわざです。

この１章の学びで、

既成概念とは違う景色をご覧になっているかと思います。

本日の第五日も同様、これまでの概念が砕かれる学びになります。

水の中の生き物や、地の鳥が出てきますが、

生物学的に考えてはいけません。

今までが、たとえで語られていたように、

生き物が創造された第五日の記述も、たとえの世界です。

第五日は、最初の生き物が出てきます。

そして、生き物の創造のクライマックスは「人」です。

生き物の創造と、

それに対する神の祝福に注目していきたいと思います。

創世記 1 章 20－23 節

20　神は仰せられた。「水には生き物が群がれ。鳥は地の上、
　天の大空を飛べ。」

21　神は、海の巨獣と、水に群がりうごめくすべての生き物を種類
　ごとに、また翼のあるすべての鳥を種類ごとに創造されたבָּרָא（バーラー）。
　神はそれを良しと見られた。

22　神はそれらを祝福して、「生めよ。増えよ。海の水に満ちよ。
　鳥は地の上に増えよ」と仰せられた。

23　夕があり、朝があった。第五日。

子どもから、これはどんなお話なの？と聞かれたら何と答えますか。

神様は、生き物を沢山造ったよ、と答えますか。じゃあ、虫はいないの？と聞かれたらどうしますか。生き物や動いているものについて説明してくださいと言われたらどうしますか。

難しいですね。　ここで登場する生き物は、

神によって創造された、「水の生き物」と「翼のある鳥」です。

贖いの「創造するבָּרָא（バーラー）」

１章１節の創造とは、無から有を生じた創造ではないと学びました。

初穂であるイエシュアによって、天と地を造られた、神と人がともに住む家を造られた、その創造בָּרָא（バーラー）には贖いの概念が入っていると学びました。ここも同じ創造בָּרָא（バーラー）です。

創世記２章７節で、人間は地のちりで造られますが、

その時の動詞は、「造るיָצַר（ヤーツァル）」です。

また、鳥や魚をどのように造るのかは書かれていません。

「群がれ」と仰せられたら、存在しています。

「水の中に生き物が群がるように」「大空を飛ぶように」と仰せられたら出来ています。　着目すべきは、無から有からかではありません。

「水の生き物」と「翼のある鳥」が、創造された בָּרָא（バーラー）なのです。

さあ、第五日に分け入っていきましょう。

七つの新しい語彙が登場します。

●生き物　חַיָּה（ハッヤー）　נֶפֶשׁ（ネフェシュ）

生き物、חַיָּה（ハッヤー）として、他にも、地に住む家畜や這うものとか、私たち人間もいます。　初めて、生き物が出てきました。

●海の巨獣 תַּנִּינִם（タンニーニム）　👈　תַּנִּין（タンニーン）の複数形

●群がる שָׁרַץ（シャーラツ）　שֶׁרֶץ（シェレツ）群がるもの（名詞）

●うごめく רָמַשׂ（ラーマス）

●鳥 עוֹף（オーフ）　鳥が動詞になると👉飛ぶ עוּף（ウーフ）

●翼 כָּנָף（カーナーフ）

水の中のうごめく生き物に、魚ということばがないのですが、

魚と考えていいと思います。

「種類ごとに לְמִין（レミーン）」は、聖書的な意味があります。

レビ記 11 章、食物について、食べてもよいものと食べてはいけないものが記されています。9－12 節、水の中の生き物でも、ひれや鱗があるかないかで、きよいものと汚れたものが分かれています。

これで惑わされますね。　生物学の話を頭にいっぱい詰めて聖書を解釈してはいけません。　「種類ごとに」とは、

「似たもの」「区別されたもの」と同義ではないかと思います。

「　生き物 חַיָּה（ハッヤー）　נֶפֶשׁ（ネフェシュ）　」

（息をするもの　呼吸するもの）

海に住むもの、空飛ぶ鳥、地の生き物、動物も、家畜も、野の獣も、地を這うものも、昆虫も、蝶々も、そして人間も息がなくなれば死んでしまいます。　息を吸って生きるものを חַיָּה（ハッヤー）　נֶפֶשׁ（ネフェシュ）といいます。　このテキストで注目すべきは、

1 章 1 節で使われた「創造された בָּרָא（バーラー）」が

1 章 21 節、水の生き物と、翼のある鳥、27 節：人間も「創造さ

れた בָּרָא（バーラー）」が使われます。

ちなみに、11－12 節：実をつける木（果樹）とか、地の植物には

造る עָשָׂה（アーサー）（素材があって造られる動詞）が使われています。

その違いは何を意味するのでしょうか。

一つ言えることは、

神が創造 בָּרָא（バーラー）した水の生き物と、翼のある鳥と、人間には

「生めよ、増えよ」と祝福します。

他の地に住む家畜、地を這うものは祝福されていません。

祝福されるのは、人間と、水の生き物と翼のある鳥だけです。

理解不可能ですよね。

神は、水と水の間を分けるようにして大空を造り、

空を天と名づけ、天の上の水と、天の下の水に分けられました。

天の下の水は一つに集められて「乾いたところ יַבָּשָׁה（ヤッバーシャー）」と

「海 יַמִּים（ヤンミーム）（複数形）」に分けられました。

乾いた所を「地」と名づけ、乾いた所を歩いた者たちこそ

「イスラエルの民」だと学びました。

一方、海（複数形）はイスラエルに敵対する諸国の民を表します。

　さて、今日のテキストは、神は海の生き物、すなわち　海の巨獣と、群がりうごめく生き物、地には、空を飛ぶ翼のある鳥を創造されたという箇所です。　一つ一つ見て行きましょう。

タンニーニム

海の巨獣תַּנִּינִם

海の生き物の巨獣として、わに、蛇、竜（架空の存在）が登場します。

申命記 32 章 33 節

そのぶどう酒は蛇（バビロン、エジプト）の毒、コブラの恐ろしい毒。
תַּנִּינִם

詩篇 74 篇 13－14 節

13　あなたは、御力をもって海を打ち破り

その水の上の　竜の頭を砕かれました。
תַּנִּינִם

14　あなたはレビヤタンの頭を踏みにじり
תַּנִּינִם

砂漠に住むものたちの餌食とされました。

タンニーニム
תַּנִּינִם で調べていくと、海の巨獣が「レビヤタン」で出てきます。

レビヤタンは、イスラエルの敵となった　アッシリア　および

バビロンやエジプトを表すたとえにもなっています。

イスラエルから見れば強国です。　聖書は、イスラエルを取り囲んでいる強国を「海の巨獣」で表わしています。

群がりうごめく生き物

水の中を群がりうごめく代表は魚です。　ここで頭を展開して、どこかに潜む伴侶となる事柄を探してみましょう。　魚・魚・魚・・・

魚にかかわるエピソードって何でしょう。

イエシュアの弟子たち、シモン、ヤコブ、ヨハネ　は漁師です。

なにゆえイエシュアの弟子たちが漁師だったのでしょうか。

漁師を集めたのは、彼らが魚と関係していたからです。

―　魚が出て来る聖書箇所　―

ルカ 5 章 1－11 節

網が破れるほどの大漁。人をとる漁師。

ペテロが夜通し漁をしたのに、雑魚一匹かからず、空しい仕事の後片

付けをしているところにイエシュアがやってきます。

沖に出て魚を捕れという話です。

当時の魚漁法では、深みに出れば魚は網の下から抜けて多くを逃がしてしまうことが常識でした。

でも「あなたが言われるから、ちょっとやってみましょう。」という雰囲気で網を下したところ、網が破れるほど大漁だったのです。

それでもう、漁師を生業にしていたペテロは驚いてしまい、私は罪深い人間です、ということになりました。

これからは魚を捕るのではなくて、人を捕る漁師になりなさいとペテロとアンデレを弟子として召されました。

「人を捕る漁師」という箇所で魚が出てきます。

ヨハネ 21 章 3－11 節

153 匹の大漁であった。

イエシュアの復活後です。生活の糧のために、漁師であった弟子たちは夜通し漁をしていましたが何も捕れませんでした。

夜が明け始める頃、イエシュアが岸辺に立って、右に網を打つように言われます。　すると 153 匹の魚が捕れたということです。

（ガリラヤ湖には153種類の魚がいたという解釈をする人がいますがおかしな話です。全種類を全部捕ることには、あまり意味がありません。）

「Τὸ δἰκτυον 網」

300+70+4+10+20+300+400+70+50=1224

153 匹の魚×8（イエシュアの表象）=1224

ここは引き網の話なのです。153 匹の話では、網が鍵語です。

すべてのものを引きずって、最終的なさばきとして、救いと滅びにかかわる重要な務め、救われる者と救われない者を取り分ける重要な働きに、あなたはかかわるのですよと言い渡した話です。

ペテロは人を漁る漁師にされました。

マタイ 13 章 47－49 節

天の御国は、あらゆる種類の魚を集める

地引き網のようなもの

天の御国の奥義が語られたたとえ話です。天の御国はあらゆる種類の魚を集めるようなものという話があります。

そして、そこから取り分けていくというのです。

エゼキエル書 47 章 1－10 節

神殿から流れ出る水が入ると死海の水が良くなり、

非常に多くの魚が住むようになる。

神殿の底から流れる、きよい生きた水が流れるといのちが生まれて、

雑魚一匹住めなかった死海に、あらゆる種類の魚が住むようになる

とあります。ここもたとえです。

このような話から、何を言おうとしているのかわかりますか。

神のご計画は、1 章であらかじめ設定されているのです。

創世記 1 章は、神の永遠のご計画を表すアウトラインです。

ですから、必然的に、ご計画に関係する話になってきます。

群がりうごめく生きものとは、贖われた異邦の民たちの象徴です。

イスラエルは入っていません。　イスラエル以外の

異邦人の贖われた者たちを象徴するのが

「　群がりうごめく生きもの　」です。

では、イスラエルはどうなったの？と尋ねたくなります。

もう一つ祝福されたものがいますよね。　鳥たちです。

もう少し、魚の話が続きます。初代教会のクリスチャンたちは、信仰

告白のシンボルマークとして、魚を意味する「イクスース」を共通の印しにしました。今でも、イクスースのシンボルマークをつけている車を見かけます。「私はクリスチャンです」と示しているのですね。

魚

イエスース
Ἰησοῦς 「イェシュア」

クリストス
Χριστος 「キリスト」

セオス
Θεός 「神」

ヒュイオス
υἱός 「子」

ソーテール
σωτηρ 「救い主」

古代ギリシア語：魚

ΙΧΘΥΣ

神の御子キリストを信じることによって、神の家族とされた異邦人の子どもたちを、聖書は「魚」になぞらえていると考えられます。このことは神によってしか創造しえないことです。

イエシュアの贖いによって、

異邦人が、三一の神の共同作品として神の子どもになるのです。

イエシュアが人として来られて、十字架上で「完了した」ということがなければ、私たちは魚にはなれませんし、贖いの創造もありません。

それゆえ神専用の語彙、

贖いの概念を含んだבָּרָא（バーラー）が使われているのです。

創世記は、無から有を生じたという話ではないのです。

だいたい 1 章は、バビロン捕囚の後に書かれているもので、

神の痛みを通して、回復した民たちの話です。

バビロン捕囚の話に乗じて展開される神のご計画がまとめられているのです。　一度死んで、回復した人たちの話でもあるのです。

もちろん神が書いておられるのですけどね。

鳥עוֹף（オーフ）と　翼כָּנָף（カーナーフ）

翼のある鳥が飛ぶように、と創造されています。

翼のある鳥の王者は「鷲」です。鷲の初出箇所を見てみましょう。

出エジプト記 19 章 4－6 節

4　『あなたがたは、わたしがエジプトにしたこと、また、あなたが

たを鷲の翼に乗せて、わたしのもとに連れて来たことを見た。

5　今、もしあなたがたが確かにわたしの声に聞き従い、

わたしの契約を守るなら、あなたがたはあらゆる民族の中にあって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。

6　あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。』

これが、イスラエルの子らにあなたが語るべきことばである。」

これがエジプトから救い出したイスラエルの民たちの身分です。

律法が作られる前、とにかく救い出して、二ヶ月間、旅をさせて

ようやくシナイ山に到着した彼らに、神は宣言しました。

「あなた方を鷲の翼に乗せてわたしのもとに連れて来た。

あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる」と。

鷲の翼に乗せる＝祭司の指導

字義通りに、イスラエルの民を何百万人も鷲の翼に乗せてくることはあり得ません。

鷲の翼に乗せるとは、イスラエルの民が、祭司であるモーセとアロンの指導のもとにエジプトから脱出し、シナイ山の麓までやってきたことを意味しています。　鷲の翼に乗せるとはそういう意味です。

モーセもアロンも、レビ族から出た祭司のトップです。

そしてイスラエルがエジプトから救われたのは、彼らが**祭司の王国**となるためです。「祭司」と「翼」は、大いに関係があるのです。

有名なイザヤ書 40 章、バビロン捕囚を経てエルサレムに帰還する民たちにイザヤを通して預言したことばです。

イザヤ書 40 章 30－31 節

30　若者も疲れて力尽き、若い男たちも、つまずき倒れる。

31　しかし、【主】を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように、翼を広げて上ることができる。走っても力衰えず、歩いても疲れない。

預言者の預言は、つい先のことではなく、終わりの時代の預言です。

終わりの時代とは、メシア王国です。

メシア王国では、イスラエルの民は新しく力を得て鷲のように翼を広げて上ることが出来る、走っても力衰えず、歩いても疲れない者になる預言です。

メシア王国では、疲れることがありません。

常にフルパワーです。

天に携挙された者たち（教会、異邦人たち）は、新しいからだが与え

られるため、御使いのようになりますが、

そうでないイスラエルの民も想像を超えた健康的な長寿のからだとなります。

イザヤ書 65 章 20 節

そこにはもう、数日しか生きない乳飲み子も、長寿を全うしない老人もいない。百歳で死ぬ者は若かったとされ、百歳にならないで死ぬ者は、のろわれた者とされる。

それゆえ、メシア王国でのイスラエルの民は、

アブラハムに神が約束されたように、星の数ほどの民になるのです。

歩けなかった者が、歩き出し走り出します。

声を出せない者が、大きな声で賛美することもできます。

目が見えなかったのに、遠くのものまで見えるようになり、

悟れなかった事柄が理解できるようになります。

霊のからだになる、これが福音です。

神によって新しく創造される「王なる祭司たち」を、

鳥が翼を広げて上ることにたとえられています。　それが、

創世記 1 章 20 節で「鳥は地の上、天の大空を飛べ」と言われる

ゆえんです。　鳥は、イスラエルの残りの者の象徴なのです。

イスラエルの民たちが、

メシア王国で与えられる務めの預言がされているのです。

祭司たちが神のみこころによって、神のみこころに適った働きがなされるとき、神の民は新しく力を得ます。

祭司たちが回復すれば、走っても力衰えず、歩いても疲れないのです。

一つの考え方として、

祭司の回復で、民たちが豊かな　いのちを持つようになります。

みことばとかかわる祭司たちの回復は、

みことばが生き始め、地の民たちを生き返えさせるのです。

みことばが死んでいれば、祭司たちも、民たちも、死んでいるのです。

「わたしは、後のことを初めから告げる」

とイザヤ（46：10）が預言しています。　ですから、

神のご計画の全貌を

知らないままでは、

いのちに結びつかない

のです。

贖いによる再創造

21 節に、神は「それを良しטוֹב（トーヴ）と見られた」とあります。

神は、海の巨獣と水に群がりうごめくすべての生き物を種類ごとに、

また翼のあるすべての鳥を種類ごとに創造されました。それは、

贖いによって再創造されたということです。

イェシュアの贖いによって、神は「それを良しと」見られました。

何故、良しと見られたのか分かりますか。

22 節を読むと分かります。　良しの基準は「　地　」だからです。

鳥だけが、「地の上に増えよ」と仰せられました。

魚は、地の上ではありません。　地の上の鳥だけが特別です。

イスラエルの残りの者は、神にとって、目の中に入れても痛くないほど愛おしい存在で、神が良しと見られた 22 節では、

鳥（イスラエルの残りの者）が、地上に住んでいるのです。

鳥が贖われて、翼を広げて上っていき、走っても力衰えず、歩いても疲れない存在になるように神はご計画されて、良しとされました。

異邦人の魚よりも、イスラエルの残りの者の鳥の方が高い位置づけです。

祝福は、魚と地にある翼のある鳥だけ

翼のある鳥を良しとして（21 節）、地にある鳥を祝福しています。

他の生き物は祝福していません。

次回、地の家畜が出てきますが、祝福していません。

地の上に鳥が存在することを、神は良しとしています。

魚は、神が良しとする基準ではありません。

神が良しとする基準は、「地の上の鳥＝地の上の祭司」です。

私たちも「王なる祭司」ですが、「地の上の」とはしていません。

水にうごめくすべての生き物（＝贖われた異邦人）は、地の上に翼のある鳥（＝イスラエルの残りの者）のゆえに祝福されています。

この内容を、パウロがローマ書 11 章 17－18 節で「接ぎ木」のたとえで説明しています。

神の祝福と命令

生めよ　増えよ　満ちよ

22　神はそれらを祝福して、「生めよ。増えよ。海の水に満ちよ。
　　鳥は地の上に増えよ」と仰せられた。
23　夕があり、朝があった。第五日。

22 節で初めて命令形が出てきます。

生むように、増えるように、満ちるように、という指示形ではなく、

はっきりとした命令形です。命令する対象が出てきたからです。

魚の群れ、翼を持つ鳥、彼らに命令しています。

祝福をして命令もしています。

命令の矛先は、すべて生き物に向けられています。

この命令形は神ご自身が、自らのご計画を実現させるための

預言的命令、神のご計画を実現させるための神の命令です。

そして、翼のある鳥たちに、祝福と命令をしています。

神の祝福は、神ご自身が実現させる表明と同時に、

神の命令を実現させる一切の恩寵が含まれています。

水にうごめく生きものとして、魚にたとえられた異邦人のクリスチャンたち、異邦人の主にある民たち、またイスラエルの残りの者が祝福されています。

祝福に応答するのは賛美

神は私たちを祝福する בָּרַךְ（バーラフ）方ですが、私たちが神を祝福することはありません。　祝福の応答として賛美をするのです。

神は祝福する、私たちは神を賛美する、同じことばでつながります。

私たちが賛美すると、神が祝福して下さるのです。

祝福の命令を、一つ一つ見て行きたいと思います。

生めよ　פְּרוּ（ペルー）（命令形）　פָּרָה（パーラー）「多くの子が与えられること」　数的増加と実を結ぶ質的な結実を意味します。

数が増えるだけではなく実も結ぶように命じています。

創世記 48 章 3 –4 節

3　ヤコブはヨセフに言った。「全能の神はカナンの地ルズで私に現れ、私を祝福して、

4　仰せられた。『見よ、わたしはあなたに多くの子を与えるפָּרָה（パーラー）。あなたを増やし、あなたを多くの民の群れとし、この地をあなたの後の子孫に永遠の所有地として与える。』

イザヤ書 11 章 1 節

エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。

若枝は、メシアの象徴です。

メシアにつながることで実を結ぶ預言です。エッサイの根株、エッサ

イからダビデが生まれ、ダビデからイェシュアが生まれる流れです。

ヨハネの福音書 15 章 8 節

あなたがた（イェシュアの弟子）が多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになります。

イェシュアの弟子が、イェシュアの中にとどまり、イェシュアも彼らの中にとどまることで多くの実が結ばれて、御父が栄光をお受けになります。

増えよ　レヴー רְבוּ（命令形）　ラーバー רָבָה

パーラー פָּרָה とともに用いられることが多いです

「増えよ」と訳されたラーバー רָבָה は「多くなる」と同時に、量だけではなく質的にも「豊かに成長する、育てる」という成熟も意味します。神は育ててくださいます。量が増えるだけではありません。　幼いままではなく、成熟させる側面を強調しています。

エゼキエル書 16 章 7 節

わたしはあなたを野原の新芽のように育て上げた。あなたは成長して大きくなり、十分に成熟して、乳房はふくらみ、髪も伸びた。
しかし、あなたは丸裸であった。

エレミヤ書 23 章 3 節

しかしわたしは、わたしの群れの残りの者を、わたしが追い散らしたすべての地から集め、元の牧場に帰らせる。彼らは多くの子を生んで増える。

これはメシア王国のことでしょう。

残りの者、散らしたすべての者を神のもとに集めて、

彼らはメシア王国で増えていきます。

イスラエルの残りの者は、天に上げられるのではなくて

普通の生身のからだです。結婚も出産もします。

教会は、霊のからだに変えられますので結婚も出産もありません。

確かにメシア王国で、生きるようになりますが、

増えるのはイスラエルの残りの者の子どもです。

1000 年の間、エジプトであまりに多く増えるので、

ファラオが恐れたほどです。多産の民族ですね。

ミルウー　　マーレー

満たせ　　מִלְאוּ **(命令形)**　　מָלֵא

これも数的に「満たせ」と言う意味です。

本質的な意味として、神のご計画とみこころを成し遂げる、

完成する預言的な意味として理解すべきです。つまりあなたがたは、

神のご計画とみこころを成し遂げよ、という命令形です。

そのためには、神のご計画を知らなければいけません。

神によって、ご計画は成し遂げられ完成し、祝福してくださるのです。

しかし、イスラエルの民は頑なで、神に反抗し続けます。

最後には反キリストがメシアだと信じ込んでしまい取り込まれて

その果てに牛耳られてしまいます。

そんな民たちに、悔い改めの「恵みと嘆願の霊（ゼカリヤ 12：10）」

を与えて、神に立ち返えるようにされるのです。　そこで今までしてきたことに衝撃を受けて、激しく泣きます。復活中の復活と言われる神のみわざです。　　イスラエル全員ではありません。

「イスラエルの残りの者」と言われる特別な者たちです。

神のご計画は、神の霊によって成し遂げられていくのです。

詩篇 20 編４－５節

4　あなたの心の望みを主がかなえてくださいますように。

あなたのすべての計画を遂げさせてくださいますように。

5　私たちは、あなたの勝利を喜び歌い　私たちの神の御名により
旗を高く掲げます。あなたの願いのすべてを【主】が遂げ（マーレー）מָלֵא
させてくださいますように。

以上、神の祝福を見てきました。

しかし多くの場合は、仲介者による祝福で、表現も変わってきます。

それは命令形ではなく、「主があなたを祝福し　～されますように」

という嘆願のかたちになってきます。

神は祝福して命令します。仲介者は命令ではなく嘆願です。

アロンの祝禱がその例です。

アロンの祝禱

教会でアロンの祝福の祈りが献げられることがありますか。

空知太教会では、礼拝の最後で、

とても深い意味のあるアロンの祝禱がなされます。

祝福の本質は変わりませんが、アロンの祝禱は、

神のご計画を指し示す預言的な祝福です。

アロンの祝祷は、神がモーセを通して与えられたものでした。

アロン自身が自分で考えて祈ったのではありません。

アロンの祝禱

民数記 6 章 24－26 節

24　主があなたを祝福し　あなたを守られますように

25　主が御顔をあなたに輝かし

あなたに対して恵み深くありますように

26　主が御顔をあなたに向け　あなたに平安を与えられますように

この祝福の中身は凄いです。

「主が」　これが出発点です。祝福の源泉は「　主　」です。

「主の御顔」　御顔がついています。　**主の御顔の表現が御子**です。

御子が父の姿を「御顔」というかたちで現しました。

26 節、御顔をあなたに向け　平安を与えられますようにという

平安（シャーローム）שָׁלוֹם は、御霊によって完結します。

御父も御子も御霊も、一つになって祝福しています。

別なかたちで、パウロの語る祈りの言葉があります。

ローマ人への手紙 11 章 36 節

すべてのものが神（御父）から発し　神（御子）によってなり

神（御霊）に至るのです。

この神に栄光がとこしえにありますように。　アーメン

これは神の民、贖われた民に向けた言葉です。

「すべてのものが神から発し」　これが源泉です。

神は「三一の神」の御父です。　御父からすべてが発して

そして次の「神によって」は、He（代名詞）「彼によって」、

これは「御子によって」と表現されています。

やがて御子にバトンタッチされて、

子がすべての「三」の祝福をことばにしています。

イエシュアが「いのちとなって御霊となった」、

「いのちをお与えになった」とは、

御霊がイエシュアを導くことで、御父の御想いをすべて受け取り、

「三」を「一」にしているということです。

聖霊だけが働いているのではありません。神は相互内在です。

お互いがお互いの中に入り込んでいるという不思議な存在です。

神のことばは「神から発し　彼によってなり　神に至るのです。

この神に栄光がとこしえにありますように。　アーメン　」です。

贖われた者たちが神に感謝して、御子を讃えて賛美しているのです。

「神から発し」とは、「御父から発し」、

「神によってなり」とは「御子によってなり」

御子の贖いで、神と人がともに住むことを実現させて神に至ります。

聖霊がすべてをなされます。　神は霊だからです。

そしてキリストの御霊が、私たちの霊の中でとりなしています。

「三一の神」がそこにいるのです。

御子だけではなくて、御霊も御父もいる事実を、

説明しないで表現しています。

神は相互内在、同時同存、同じ所にいて、私たちの内側にいます。

また、天にもいます。

40 日間の顕現のときには、弟子たちの内にもいながら、

キリストは、多くの場所で、多くの人に、御国の福音を再度語るため

に現れています。普通では考えられません。祝福の力は大きいのです。

「三一の神」は、私たちとともに住むために、

すべてのものを私たちに与えようとしています。

教理的な事柄ではありません。　三位一体という教理ではなくて、

神の働き、動き、恩寵、そういったすべてが

「三一の神」の中に表されているのです。

「三一の神」を説明するのは、

神のなされた一連の出来事を受肉から着座まで説明しなければ、

意味が分からないと思います。

一連の贖いの出来事の背景にある「三一の神」が、

私たちを祝福してくださる祈りとして「アロンの祝禱」があります。

祝祷が出ると、礼拝はいよいよ終わりを迎えます。

最後が重要です。　礼拝の始まりから終わりまで、

どのように、霊の中で受けとめることができたでしょうか。

私たちに語られる神のことばを、霊の中で聞き、霊の中で祝福を受け、

霊の中で応答するためには、最後まで気を緩めてはいけません。

最後の締めの祈りが、最も大切なのです。

祭司は祝福の仲介者

祭司は礼拝する者たちのために、神が祝福するときの仲介者です。

実際は神が祝福しています。

だから私たちは、応答して感謝して賛美するのです。

この霊的ないのちを、自分の霊の中で感じることが礼拝です。

今回のまとめ

水にうごめくすべての生き物と、

翼を持つすべての鳥の創造に対する、神の祝福について学びました。

水に群がりうごめくすべての生き物が、

神に贖われた諸国の民である異邦人、

翼を持つすべての鳥を、

イスラエルの残りの者と解釈しました。

翼を持つすべての鳥が地にいるので、魚も翼のある鳥に接ぎ木され

て寄りかかることで、魚も祝福されているのです。

神の良しの中に、接ぎ木されているということなのでしょう。

神の良しとする基準の地には、鳥がいます。

翼を持った鳥、**王なる祭司たちの鳥**がいるわけです。

もちろん神は、実際、鳥も、魚も造られました。

しかし表面的解釈だけでは、神のご計画を見ることはできません。

神は生物学的な鳥や魚でたとえながら、神と人がともに住む家を

創造するという目的に沿った骨子を、創世記１章で啓示したのです。

神が祝福される重大さを、私たちは心に留めなければなりません。

なぜなら神は祝福の神だからです。

神が祝福するとは、

「三一の神」がすべてを与えることと直結します。

神は、神のすべてを、私たちに与えたいのです。

神とのかかわりを「祝福」というかたちで、

皆さんに与えてくださっていることを

忘れないでいてくださいね。